

福岡市方言において最も伝えたい内容を マークする方法について

— 「トッテ」を使用した文の場合 —

内 田 来 樹

1. はじめに

福岡市若年層方言に「トッテ」がある。平塚（2011）によると、「トッテ」は福岡市方言のノダ文を表す準体助詞の「ト」に、福岡市若年層方言の「ーッテ」が接続したものである。福岡市若年層方言の「ーッテ」は引用や伝聞をマークするのに用いられ、「ートッテ」を接続させることで、話し手の一連の発話の中でその文が「最も伝えたいことである」ことをマークするとしている。筆者はこの「ートッテ」が「最も伝えたいことをマークする」という点に疑問を持ち、会話の中で「最も伝えたいことをマークする」のは、むしろ発声の仕方、具体的には強く発音することによるのではないかと考えた。

2. 「トッテ」について

この節では、「トッテ」の先行研究についてと、先行研究と筆者の考えの相違についてまとめていく。

2.1 先行研究

植田（1992）では「トッテ」は「何か強烈なことが起こったときに、他人に自分の熱い気持ちを伝えるため」、「とにかく人に言いたくてたまらないとき」に用いられる「強調表現」であるとしている。また平塚（2011）の内容をまとめると以下ようになる。以下、2.1 節末までが筆者によるまとめである。

ノダ文に接続する「ッテ」は伝聞としては解釈されず、聞き手が当該情報についての情報をもたないことを前提に、その発話が聞き手にとって重要な情報であることを訴えかける意味を持つ。ノダ文に「ッテ」を接続させたときとそうではないときの違いは「話し手にとって、また、聞き手にとってその情報がいかに重要であるか」ということが関係している。「ッテ」を接続させることで、話し手の一連の発話の中でその文がもつ情報が「最も伝えたいことである」ことをマークするようになる。具体例としては、

昨日、天神に行ったト。そしたら芸能人に会ったトッテ！
このような場合、話し手の最も伝えたいことは「天神に行った」ことではなく、「芸能人に会った」ことである。

昨日、天神に行ったトッテ。そしたら芸能人に会ったト！
とすると、「天神行ったこと」が最も伝えたいことになってしまい、不自然である。つまり、単に新しい話題を導入するだけのときには、ッテを用いることは出来ないのである。また、

昨日、天神に行ったトッテ。そしたら芸能人に会ったトッテ！
のように、すべてにッテを接続させてしまうと、「天神に行った」ことと「芸能人があったことが（実際には違うのに）対等の情報価値をもつことになってしまうため、不自然である。

2.2 先行研究と筆者の考えの相違点について

筆者は、平塚（2011）が具体例として挙げた、

昨日、天神に行ったトッテ。そしたら芸能人に会ったト！
が不自然であると述べられている点について疑問を感じた。平塚（2011）では、「天神に行った」ことが最も伝えたいことになってしまうため、不自然であるとしているが、筆者はこの具体例の中で最も伝えたいことは「芸能人に会った」ことであると思い、不自然さを感じることはなかった。その理由として「芸能人に会ったト！」で表記に用いられている「！」記号から、ノダ文を強く発声することで「芸能人に会った」ことが最も伝えたいことになっているのではないかと考えた。すなわち、「最も伝えたいことをマークする」働きにおいて「トッテ」よりも発声の仕方のほうが影響しているのではないかと考えたのである。

3. 調査概要

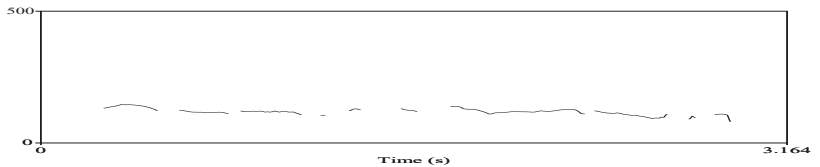
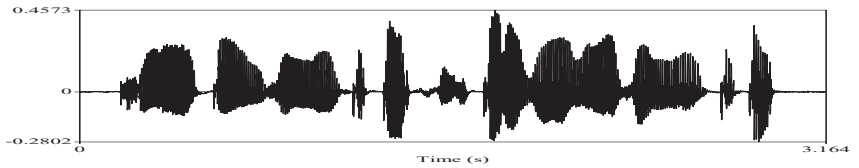
3.1 音声刺激の作成

本調査では、「トッテ」が実際に「最も伝えたいことをマークする」働きがあるのかを調べるため、次の例文4種（A - D）を作成して録音をした。

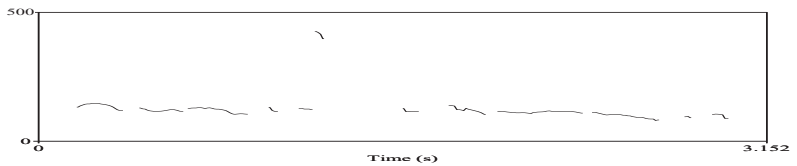
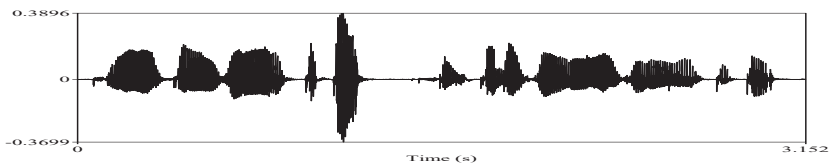
- A. 昨日、天神に行ったと。そしたら、芸能人に会ったと。
- B. 昨日、天神に行ったと。そしたら、芸能人に会ったとって。
- C. 昨日、天神に行ったとって。そしたら、芸能人に会ったと。
- D. 昨日、天神に行ったとって。そしたら、芸能人に会ったとって。

例文の作成にあたっては、平塚（2011）との比較をおこなうため、平塚（2011）の例文を参考にした。また録音する際、次の3パターンで音声録音した。

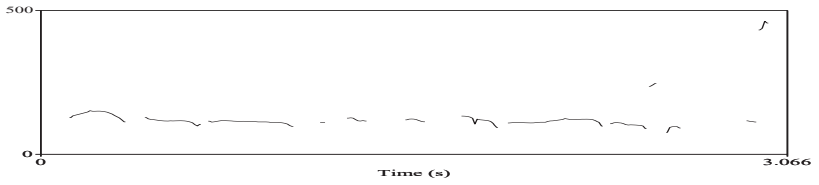
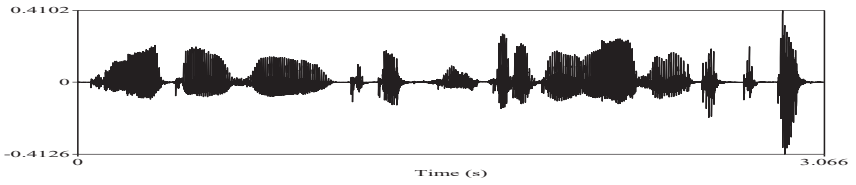
(i) 前半の文と後半の文で同じ調子で発声する。(ii) 前半の文の「ト (トッテ)」を強く発声する。(iii) 後半の文の「ト (トッテ)」を強く発声する。結果、例文 4 種に 3 パターンずつの録音で 12 通りの録音ができた。以下は `praat` によって 12 通りの録音を示したもので、強く発声した箇所には下線を引いている。



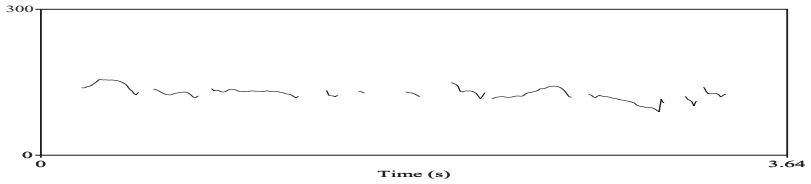
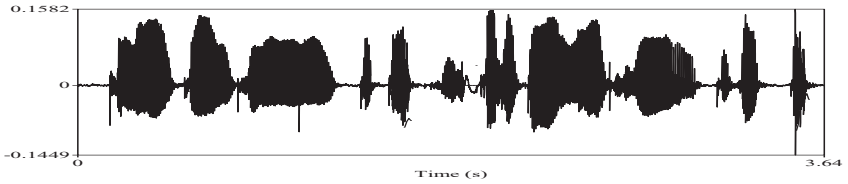
A - i 昨日、天神に行ったと。そしたら芸能人に会ったと。



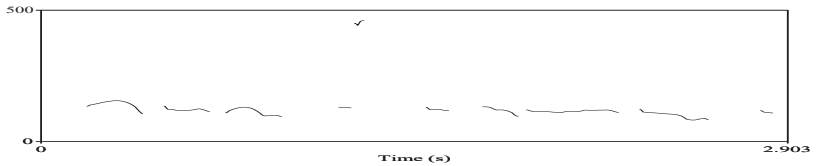
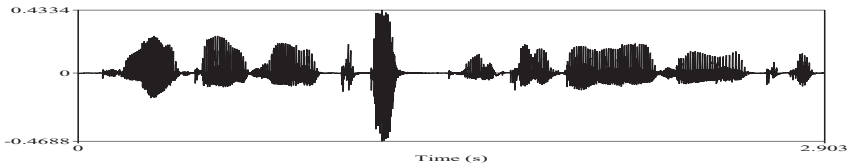
A - ii 昨日、天神に行ったと。そしたら芸能人に会ったと。



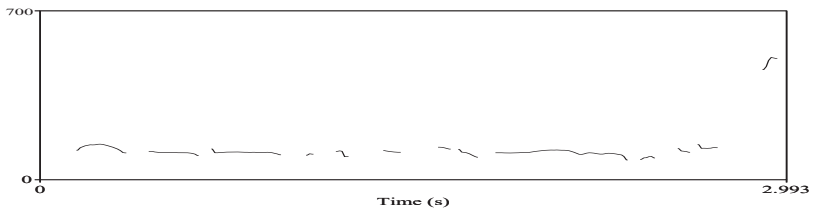
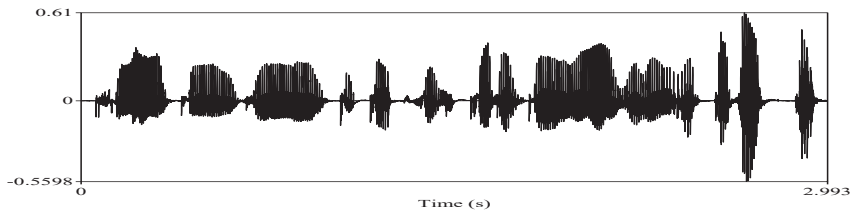
A - iii 昨日、天神に行つたと。そしたら芸能人に会つたと。



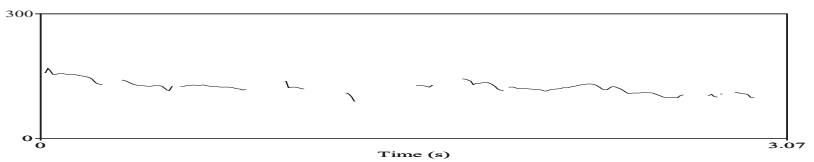
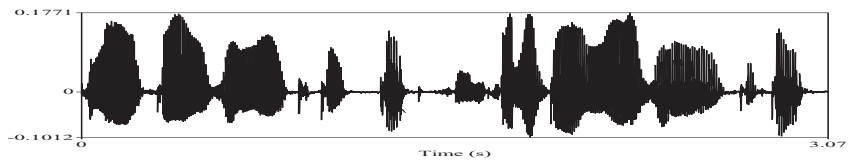
B - i 昨日、天神に行つたと。そしたら芸能人に会つたとつて。



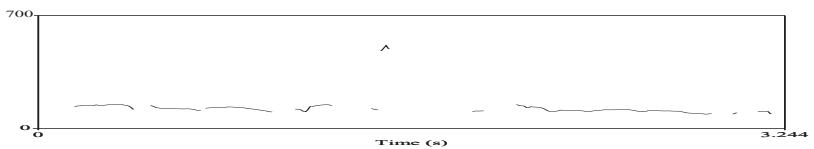
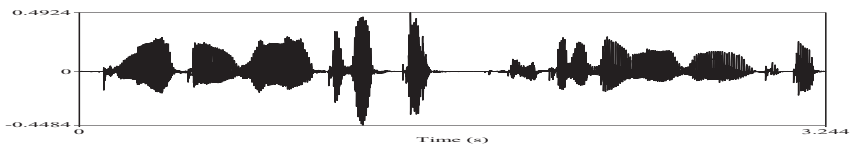
B - ii 昨日、天神に行つたと。そしたら芸能人に会つたとつて。



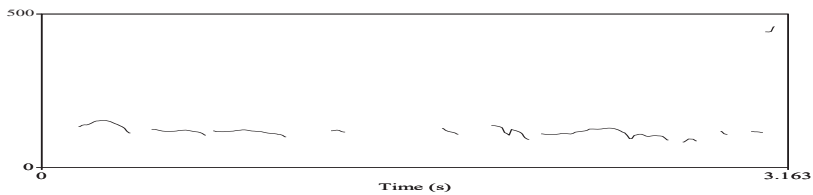
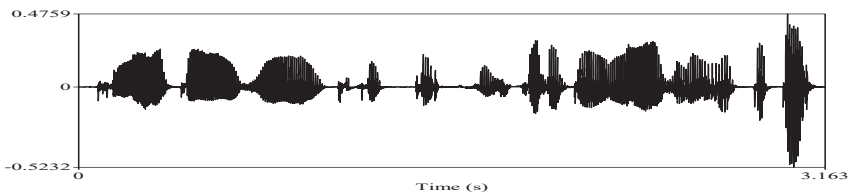
B - iii 昨日、天神に行ったと。そしたら芸能人に会ったとって。



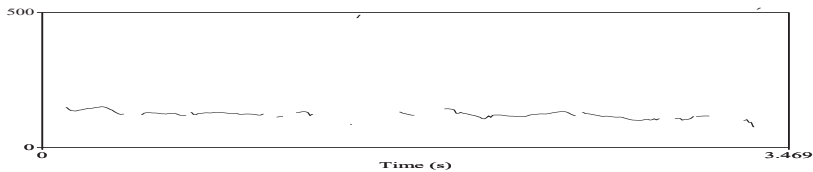
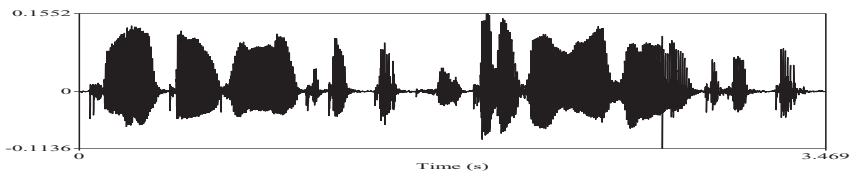
C - i 昨日、天神に行ったとって。そしたら芸能人に会ったと。



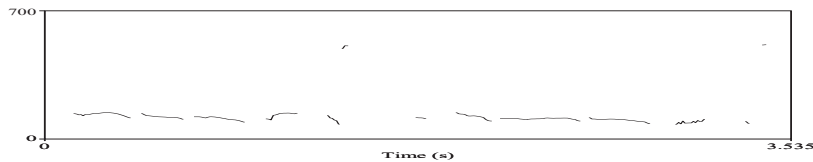
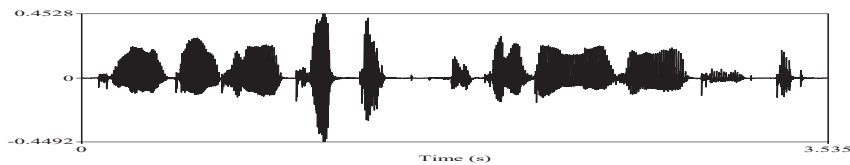
C - ii 昨日、天神に行ったとって。そしたら芸能人に会ったと。



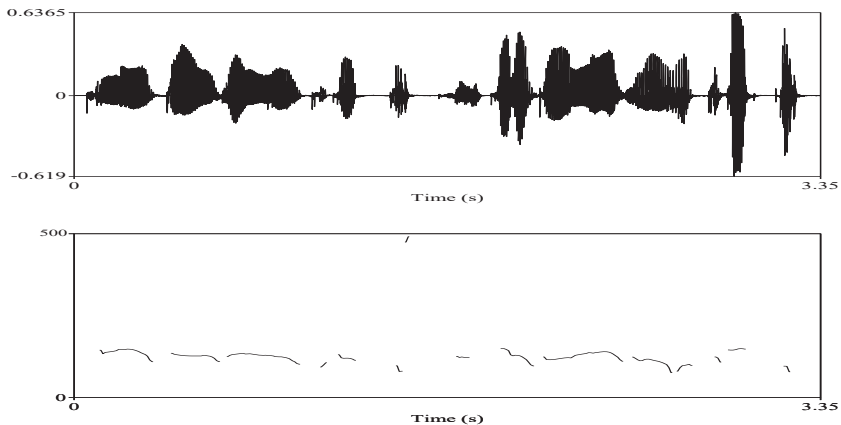
C - iii 昨日、天神に行ったとって。そしたら芸能人に会ったと。



D - i 昨日、天神に行ったとって。そしたら芸能人に会ったとって。



D - ii 昨日、天神に行ったとって。そしたら芸能人に会ったとって。



D - iii 昨日、天神に行ったとって。そしたら芸能人に会ったとって。

各図の上段は文の中での発話の強さを表している。また、下段は発話の高さを表している。例文 A を比較すると、A - i から A - iii で下のデータ、つまり高さについては差があまりない。一方で、A - i と A - ii を比較すると、A - ii が前半の文の「ト」の箇所が発話が強くなっていることが分かる。A - i と A - iii を比較すると、A - iii の後半の「ト」の箇所が発話が強くなっていることが分かる。同様に例文 B から例文 D においても、強さに違いがあることが分かる。本稿ではこれら「ト（トッテ）」を強く発音したものを「強調」^注している箇所とする。高さには大きな変化がなく、イントネーションによって特に高くなっている箇所もない。

注：郡（1989）によると、東京語ではフォーカスがある語は語アクセントによる音調の山が高くなり、以後の語群はアクセントによる音調の山が抑えられるとしている。フォーカスの後の平板アクセントの語は次に続くごと音調的に融合する傾向があり、文末の語にフォーカスがある場合も高まりがあるが、その山はその前の山に比べて特に高くなく、フォーカスの前にある語群は、後にフォーカスがあるからといってとくに音調的な変化を受けることはないとしている。

3.2 調査方法

調査は面接方式でおこなった。インフォーマントに 3.1 節で作成した音声刺

激(録音 12 通り(項目))を 2 回ずつ聞いてもらった。1 項目聞き終わるたびに、前半の文と後半の文の内容では、どちらがより「伝えたいこと(強調されている文)」と感じるか回答してもらった。回答の選択肢は、「前半がより伝えたいと感じる」・「同じ」・「後半がより伝えたいと感じる」の 3 択とした。また、その他に気になる点があれば、自由に述べてもらった。

3.3 インフォーマント

インフォーマントは、福岡市若年層方言話者である、20~23 歳の男性 15 名、女性 10 名の計 25 名に調査を実施した。インフォーマントの生育地は福岡市 15 名、春日市 10 名である。春日市は福岡市に隣接しており、「トッテ」を福岡市の話者と同様の用法で使用するため、今回の調査では春日市在住者も調査対象とした。以下はインフォーマント(a~x)の生育地の詳細である。

- | | | | | | | | | |
|-------|------|----|-------|------|----|-------|------|----|
| a…福岡市 | 21 歳 | 男性 | b…福岡市 | 22 歳 | 男性 | c…福岡市 | 22 歳 | 女性 |
| d…春日市 | 21 歳 | 男性 | e…春日市 | 20 歳 | 男性 | f…春日市 | 23 歳 | 女性 |
| g…春日市 | 21 歳 | 男性 | h…福岡市 | 22 歳 | 女性 | i…福岡市 | 21 歳 | 女性 |
| j…福岡市 | 22 歳 | 男性 | k…福岡市 | 21 歳 | 男性 | l…福岡市 | 22 歳 | 男性 |
| m…福岡市 | 22 歳 | 男性 | n…福岡市 | 21 歳 | 女性 | o…春日市 | 21 歳 | 男性 |
| p…春日市 | 22 歳 | 男性 | q…福岡市 | 22 歳 | 女性 | r…福岡市 | 22 歳 | 女性 |
| s…春日市 | 22 歳 | 女性 | t…春日市 | 22 歳 | 女性 | u…福岡市 | 22 歳 | 男性 |
| v…春日市 | 22 歳 | 男性 | w…福岡市 | 22 歳 | 男性 | x…春日市 | 21 歳 | 女性 |
| y…福岡市 | 21 歳 | 男性 | | | | | | |

3.4 予測

平塚(2011)から導かれる調査結果の予測と、筆者が考える調査結果の予測は次の通りである。

平塚(2011)からの予測				筆者の予測			
	i	ii	iii		i	ii	iii
A				A	同じ	前半	後半
B	後半	後半	後半	B	同じ	前半	後半
C	前半?	前半?	前半?	C	同じ	前半	後半
D				D	同じ	前半	後半

平塚(2011)では例文 A および例文 D についての記述はされていないため、無記入としている。例文 C について、平塚(2011)では不自然であるとしているが、「トッテ」が前半の文にあることから、平塚(2011)による予測は「前

半？」とした。平塚（2011）による予測と筆者による予測の異なる点で、特に注目したい点を太字で記した。B - ii については後半の文に「トッテ」が用いられているため、平塚（2011）からは「後半がより伝えたいと感じる」が予測される。一方、筆者は発話の「強調」が「最も伝えたいと感じること」に影響すると考えており、「強調」が前半でなされる B - ii については「前半がより伝えたいと感じる」を予測する。同様に C - iii でも後半の文に発話の「強調」をしていることから「後半がより伝えたいと感じる」を予測する。

4. 調査結果・分析

4.1 調査結果

選択肢を 1…前半がより伝えたいと感じる、2…同じ、3…後半がより伝えたいと感じる、として集計をおこなった。インフォーマントごとの回答は巻末の表 1 にまとめて示してあるので参照されたい。

4.1.1 例文 A の調査結果

例文 A の回答を集計した結果は次のようになる。

A - i で、	1…前半がより伝えたいと感じる	1 名
	2…同じ	17 名
	3…後半がより伝えたいと感じる	7 名
A - ii で、	1…前半がより伝えたいと感じる	18 名
	2…同じ	5 名
	3…後半がより伝えたいと感じる	2 名
A - iii で、	1…前半がより伝えたいと感じる	0 名
	2…同じ	4 名
	3…後半がより伝えたいと感じる	21 名

4.1.2 例文 B の調査結果

例文 B の回答を集計した結果は次のようになる。

B - i で、	1…前半がより伝えたいと感じる	0 名
	2…同じ	7 名
	3…後半がより伝えたいと感じる	18 名
B - ii で、	1…前半がより伝えたいと感じる	10 名
	2…同じ	7 名
	3…後半がより伝えたいと感じる	8 名
B - iii で、	1…前半がより伝えたいと感じる	0 名

2…同じ	0名
3…後半がより伝えたいと感じる	25名

4.1.3 例文Cの調査結果

例文Cの回答を集計した結果は次のようになる。

C - i で、1…前半がより伝えたいと感じる	3名
2…同じ	13名
3…後半がより伝えたいと感じる	9名
C - ii で、1…前半がより伝えたいと感じる	20名
2…同じ	2名
3…後半がより伝えたいと感じる	3名
C - iii で、1…前半がより伝えたいと感じる	4名
2…同じ	5名
3…後半がより伝えたいと感じる	16名

4.1.4 例文Dの調査結果

例文Dの回答を集計した結果は次のようになる。

D - i で、1…前半がより伝えたいと感じる	0名
2…同じ	6名
3…後半がより伝えたいと感じる	19名
D - ii で、1…前半がより伝えたいと感じる	17名
2…同じ	2名
3…後半がより伝えたいと感じる	6名
D - iii で、1…前半がより伝えたいと感じる	0名
2…同じ	2名
3…後半がより伝えたいと感じる	23名

なお、例文Dでは10名のインフォーマントから、文の意味は理解できるが、「トッテ」が2回続く文に違和感があるとの回答があった。

4.1.5 筆者の予測と結果の比較

筆者の予測と結果の違いは次のようになる。

	筆者の予測				結果		
	i	ii	iii		i	ii	iii
A	同じ	前半	後半	A	同じ	前半	後半

B	同じ	前半	後半
C	同じ	前半	後半
D	同じ	前半	後半

B	後半	前半	後半
C	後半	前半	後半
D	後半	前半	後半

予測と結果の大きな違いが出た箇所としてB-iとC-iとD-iが挙げられる。いずれも「同じ」という回答が多いという予測を立てたが、結果ではいずれも「後半がより伝えたいと感じる」という回答が最多であった。また、B-iiでは「前半がより伝えたいと感じる」という回答がかなり多くなるという予測をしたが、結果は、「前半がより伝えたいと感じる」が一番多い回答ではあるが、「後半がより伝えたいと感じる」、「同じ」と答えた回答とがほとんど同数になっている。

4.2 分析

4.2.1 各例文の比較・分析

A-iでは「同じ」の回答が最も多かったが、A-ii、A-iiiではそれぞれ「強調」して発話した文が「より伝えたいと感じる」という回答が最も多くなっているため、「強調」の「最も伝えたいことをマークする」働きが少なくとも「トッテ」と同様にあるということが分かる。

B-iは、A-iと比べて、「同じ」の回答が少なくなっており、「トッテ」にも「最も伝えたいことをマークする」働きがあることが分かる。B-iiでは、「同じ」の回答が7名、「後半がより伝えたいと感じる」の回答が8名と例文A-iiの場合よりいずれも回答数が多くなっている。このことから、「強調」を、前半の文でおこない、後半の文に「トッテ」がある場合では、「トッテ」と「強調」とを比較すると、「最も伝えたいと感じる」ことに影響する働きが同等か「強調」のほうが若干ではあるが働きが大きいことが分かる。B-iiiは、インフォーマントの全員が「後半がより伝えたいと感じる」と回答した。このことから、「強調」と「トッテ」の両方が後半の文に付随することで、「最も伝えたいことをマークする」働きの相乗効果があると言える。

C-iでは、「同じ」の回答が最も多く13名であった。例文Aおよび例文Bとの違いとして、C-iは、前半の文に「トッテ」がついているにも関わらず、「後半がより伝えたいと感じる」と回答した人が多いという結果になった。この結果については次の節で考えていく。C-iiでは、「前半がより伝えたいと感じる」と回答したのが20名と最も多くなった。もっとも、「強調」と「トッテ」が前半の文に付随しているにもかかわらず、全員が「前半がより伝えたいと感じる」と回答したわけではなく、「同じ」と回答した人が2名、「後半がより伝えたい

と感じる」と回答した人が3名いた。これは、「前半がより伝えたいと感じる」と答えた人が予測よりはやや少なかったということになる。C - iii では、「後半が伝えたいと感じる」と回答した人が最も多く16名で、「前半が伝えたいと感じる」と回答した人が4名であった。このことから、「トッテ」を、前半の文につけ、後半の文を「強調」する場合には、「最も伝えたいことをマークする」働きは「トッテ」より「強調」のほうが大きいことが分かる。また、B - iii と C - iii では、「前半がより伝えたいと感じる」と回答した人と「後半がより伝えたいと感じる」と回答した人の差がC - iii のほうが大きいことが分かる。つまり、前半の文と後半の文で、「トッテ」をつける箇所と「強調」をする箇所の違いで「最も伝えたいことをマークする」働きの違いがあることが分かる。この違いについても次の節で考えていく。

D - i では「後半がより伝えたいと感じる」と回答した人が19名と最も多かった。これはA - iの結果とは異なり、「トッテ」が両方の文についたときは後ろの文が「より伝えたいと感じる」ことが分かる。D - ii、D - iiiの結果では、「強調」をした文のほうが、それぞれ回答が多かったことから、「強調」が「最も伝えたいと感じる」ことに影響していることが分かる。もっとも、半数近いインフォーマントから例文Dには違和感があるとの回答があった。これは、平塚(2011)で述べられている「トッテ」が2回続くことは不自然であるということと同様の結果であると言える。

4.2.2 インフォーマントの回答の分析

表1の全体の結果からインフォーマントの回答の傾向について分析していく。例文Bでは、B - iについては全員が「同じ」か「後半をより伝えたいと感じる」と回答し、「前半をより伝えたいと感じる」と回答した人はいなかった。その一方で、B - iiについては「同じ」か「前半をより伝えたいと感じる」と回答した人、すなわちB - iと比べると比較的前半の文(「強調」して読まれた文)を「より伝えたいと感じる」と回答した人が15名いて多数派である。ここで注目すべきはこのB - iiについて、「後半をより伝えたいと感じる」と回答した人が8名おり、その8名のなかでインフォーマントd、k、l、q、t、yの6名が例文Bの3パターンについては全て「後半をより伝えたいと感じる」と回答していることである。このことから、「強調」する箇所に関係なく(平塚(2011)の言うように)「トッテ」により「文のなかで最も伝えたいことをマークする」方略をとっているインフォーマントも少なからずいることが分かる。

次に、例文Cを見ていく。C-iとC-iiiを比較し、C-iで、「同じ」もしくは、「後半がより伝えたいと感じる」と回答した人の中で、C-iiiで「前半がより伝えたいと感じる」と回答した人がおり、b、r、t、yの4名であった。多数派は「後半がより伝えたいと感じる」と回答した人で17名である。このことから、例文Cでは、「最も伝えたいことをマークする」という働きについては「トッテ」よりも「強調」のほうがもたらす影響が強いことが分かる。そのように回答したインフォーマントが例文Bよりも例文Cのほうが多いことから、例文Cではより「最も伝えたいことをマークする」働きに「強調」が影響していることが分かる。また、インフォーマントf、j、k、qについてはC-iでは「同じ」と回答し、C-iiiでも「同じ」と回答している。しかし、C-iiでは「前半がより伝えたいと感じる」と回答している。これは実は、例文Bのインフォーマントa、fにも同様のことが言えるのだが、文の「強調」と「トッテ」の「最も伝えたいことをマークする」働きが同じあると認識していると思われる。ただし、例文Bではその傾向がみられなかったインフォーマントにも例文Cではそのような傾向がみられるため、例文の「トッテ」がつく箇所によって、「最も伝えたいことをマークする」働きに差があることが分かる。

4.2.3 分析のまとめ

4.2.1節から、「トッテ」と「強調」がともに、「最も伝えたいことをマークする」働きがあることが分かる。そして、「トッテ」よりも「強調」のほうが、より「最も伝えたいことをマークする」働きが強いことが分かる。しかし、その働きの差は「トッテ」がつく箇所によって変化している。また、例文Dのように「トッテ」が2回用いられた文については、違和感があるという回答が多く、平塚（2011）で述べられていたことと、同様の結果が得られた。

4.2.2節から、多くのインフォーマントが「強調」によって「最も伝えたいこと」を判断しているが、インフォーマントによっては、「強調」の有無に関わらず、「トッテ」によって「最も伝えたいこと」を判断していることが分かる。これも、「トッテ」がつく箇所によって差があることから、どこに「トッテ」を使用するのかが、多少なりとも判断に影響していることが分かる。

5. 考察

4.2節で「トッテ」と「強調」ともに、「最も伝えたいことをマークする」働きがあり、その働きの大きさは「強調」の方が大きいことが分かった。しか

し、B - ii と C - iii の調査内容と結果を比較すると、「トッテ」と「強調」の働きの大きさの差に違いがあることが分かる。なぜなら、B - ii では、「強調」を前半でおこない、「トッテ」を後半に使用している。C - iii では、「トッテ」を前半に使用し、「強調」を後半でおこなっている。そのため、「トッテ」と「強調」の「最も伝えたいことをマークする」働きが同じであれば、B - ii と C - iii の結果は類似したものになると考えられるが、B - ii の結果は、「前半がより伝えたいと感じる」という回答が 10 名、「後半がより伝えたいと感じる」という回答が 8 名で、回答の差が僅差であるが、C - iii の結果は、「前半がより伝えたいと感じる」という回答が 4 名、「後半がより伝えたいと感じる」という回答が 16 名とかなりの差があるからである。また、C - i のように「強調」していないにも関わらず、「トッテ」がついている前半よりも後半の方が「より伝えたいと感じる」、もしくは「同じ」という回答した人が多いという結果になった。そのため、この節ではなぜ、「強調」の方が「最も伝えたいことをマークする」働きが大きいという結果になったのか、また、「トッテ」が接続する箇所によってその差に変化があったのかについて考えていく。

5.1 C - i の考察

まず、C - i の結果を考察する前に「トッテ」がどのようにして使用されるようになったのかを平塚 (2011) から考えていく。

平塚 (2011) では、ノダ文に接続する「ッテ」の発達過程について次のように考えている。ノダ文に接続する「ッテ」の用法 (最も伝えたいことをマークする) は、「ッテ」の用法の一つである、「話し手との知識・認識のずれの明示の用法」が拡張したものであるとしている。「話し手との知識・認識のずれの明示の用法」とは、発話時に話してと聞き手のもっている情報量が違うことを前提に用いられるもので、話し手が既に言ったことが聞き手には聞こえていないときや、忘れていたとき、納得していないときに再度伝えるものであるとしている。この用法が拡張し、聞き手の情報量がゼロであっても、「とにかく一方的に話し手の認識を伝達する」という機能がノダ文に接続するッテに備わったのではないかとしている。この用法が用いられる条件としてノダ文でなければならない理由としては、次のように述べている。「話し手との知識・認識のずれの明示の用法」とは違い、聞き手は当該情報をもっていないので、ノダ文が新情報の伝達の機能を担うことで、聞き手に情報がない状態における情報伝達を果たしているためとしている。つまり、「～トッテ」という表現は、「ト」が新情報の伝達という基本的な役割を担い、そのうえで「ッテ」が「最も伝え

たいことをマークする」という機能を担うことで成り立っているのではないかとしている。また、「ツテ」には伝聞の用法があり、伝聞の用法では非ノダ文のみを用い、「最も伝えたいことをマークする」用法においては、ノダ文のみを用いることで、形式と用法の関係を明晰化しようとする働きもあったと思われるとしている。

平塚 (2011) が述べるように、B - i の例文では「トツテ」が「最も伝えたいことをマークする」働きがあるという結果になった。しかし、「トツテ」が「最も伝えたいことをマークする」働きのみである場合、C - i の例文「私は天神に行ったとって。そしたら芸能人に会ったと。」では、「強調」をしていないため、「トツテ」の「最も伝えたいことをマークする」用法のみが働き、「天神に行ったこと」が「より伝えたいと感じる」という回答が圧倒的になるはずである。また、C - ii でも、「強調」と「トツテ」が前半に用いられているため、B - iii の結果のようにインフォーマントの全員が「前半がより伝えたいと感じる」と回答するのではないかと考えられる。だが、結果はそのようにはなっていないため、例文 C では、「トツテ」が平塚 (2011) の「最も伝えたいことをマークする」用法ではなく、その他の用法として用いられたのではないかと考える。そこで、例文 B と例文 C の違いである、「トツテ」が接続する箇所に着目し考えていく。平塚 (2011) では、「トツテ」を用いる例文を次のように挙げている。

(32) 聞いてよ、僕、甌島に調査に行く {トツテ / #ツテ / *んだって}。

(33) 君は知らないだろうけど、玄界灘の魚はおいしい {トツテ / #ツテ / *んだって}。

(34) 言ってなかったと思うけど、僕のいところは大学の先生 {トツテ / #ツテ / *なんだって}。

※ここでは平塚 (2011) で使われていた例文番号をそのまま使用している。

(32) ~ (34) の例文から分かるように、「最も伝えたいことをマークする」用法として「トツテ」を用いるときは、すべて文末位置（あるいは一連の発話末位置）である。このことをふまえ、例文 B と例文 C の違いについて述べる。

例文 B は、(32) ~ (34) と同様に「トツテ」が後半の文末に位置しており、そのあとには文は続かない。一方、例文 C は、「トツテ」が前半の文末に位置しており、そのあとには後半の文が続くという (32) ~ (34) や例文 B とは違う形になっている。そこで、インフォーマントが、例文 C の「トツテ」は文末に接続しているという意識があるのか、すなわち、「トツテ」を「最も伝えたいことをマークする」用法として考えているのか、疑問に感じた。なぜな

ら、「トッテ」が「最も伝えたいことをマークする」用法として考えられているのであれば、C - iの結果はB - iの結果と少し数値の誤差はあるかもしれないが、「トッテ」が用いられた文が「より伝えたいと感じた」箇所になると考えられるからである。しかし、結果は5.1.3節で記述している通り、そのようにはなっていない。むしろ、「トッテ」が用いられた前半の文の内容を「より伝えたいと感じる」と答えた回答が3人とかなり少なくなっている。これは、例文Bと例文Cの違いによって分析できると考える。例文Bは、「トッテ」が後半の文の末尾にあり、そのあとに、文が続いていない。例文Cでは「トッテ」が前半の文の末尾に位置しており、そのあとに、後半の文が続いている。また、後半の初めに「そしたら」という接続詞が接続している。このことから、筆者は「トッテ」の後に、「そしたら」が接続する場合、「トッテ」に文と文を接続する「接続詞的な用法」が強く出ると考える。

5.2 C - ii の考察

C - iiの結果について、5.1節をふまえながら考察していく。C - iの結果とC - iiの結果の比較をすると、C - iiでは5.1節で記述した例文Cの「トッテ」は「接続詞的な用法」で用いられているという意識が、インフォーマントのなかで薄れたのではないのかと考える。つまり、発話のなかで「トッテ」を「強調」することにより、「トッテ」の用法、働きの意識がインフォーマントのなかで変化したのではないかと考える。この変化により、C - iでは、「トッテ」を「接続詞的な用法」として意識しており、「後半がより伝えたいと感じる」という回答が多かったが、C - iiでは、「トッテ」を「強調」したことにより、「トッテ」が「最も伝えたいことをマークする」用法として意識されたために、「前半がより伝えたいと感じる」という回答が増えたのではないかと考える。しかし、インフォーマントのなかには、文がそのあとと続いている「トッテ」の接続は、「接続詞的な用法」としてのみ解釈する者がいるために、B - iiiでは全てのインフォーマントが「後半がより伝えたいと感じる」と回答したのに対して、C - iiでは全てのインフォーマントが「前半がより伝えたいと感じる」という回答にはならなかったのではないかと考える。

5.3 B - ii・C - iii の考察

5.1節と5.2節をふまえ、B - iiとC - iiiの回答の結果についても考えていく。上で、B - iiとC - iiiの調査結果から、「トッテ」と「強調」の「最も伝えたいことをマークする」働きの大きさの差について違いがあると述べた。その理由として、5.2節の「強調」による「トッテ」の用法の変化が挙げられると考える。

B - ii では、「強調」を前半の文にしており、「トッテ」も後半の文末（一連の発話末）に接続していることから、「トッテ」が「最も伝えたいことをマークする」働きがあり、「トッテ」と「強調」の「最も伝えたいことをマークする」働きにおいて、差があまりみられなかったのではないかと考える。その一方で、C - iii では、「強調」を後半の文でしており、「トッテ」は前半の文に用いられている。そのため、「トッテ」が「接続詞的な用法」としての働きをし、「トッテ」と「強調」の「最も伝えたいことをマークする」働きに大きな差がみられたのではないかと考える。

6. まとめと今後の課題

今回の調査で、「トッテ」と「強調」がともに、「最も伝えたいことをマークする」働きがあることが分かった。その「最も伝えたいことをマークする」働きは、「トッテ」が接続する箇所によって、「トッテ」と「強調」の働きの大きさに差が生じる。例文Bのように「トッテ」が後半の文の末尾にあり、そのあとに文が続かない場合では、「トッテ」は「最も伝えたいことをマークする」用法で使用されるため、「トッテ」と「強調」の「最も伝えたいことをマークする」働きの大きさに、差はあまりみられなかったと考える。一方で、例文Cのように、「トッテ」が前半の文で使われた後に文が続く場合では、「トッテ」は、「接続詞的な用法」として解釈されると考える。そのため、例文Cでは、「トッテ」と「強調」の「最も伝えたいことをマークする」働きの大きさに差がかなりみられたのではないかと考える。また、例文Dのように「トッテ」が2回続くような場合では、（平塚（2011）が言うように）不自然であると感じる話者が相当数いるということが分かった。

今後の課題として、次のことを挙げる。今回の調査で福岡市方言では、一連の発話の中で最も伝えたいことをマークする際に、発話の「強調」をおこなうことが分かったが、これは、郡（1989）でも述べられているように東京語ではみられないものである。そのため、この「強調」の方法が福岡市方言では「トッテ」を使用する場合にのみ使われるのか、それとも他の場合でも使われるのかを調査する必要がある。また、「トッテ」をそのあとにも文が続くときに使用した場合では、「接続詞的な用法」として使用されているという分析が妥当かどうか、他にも「トッテ」を使用したあとに文が続く例文を設定し、調査する必要がある。その例文には、「そしたら」のように接続詞が必ず必要なのか、それとも、「トッテ」だけでも、接続の意味になるのか考える必要がある。例文Dのように「トッ

テ」が2回繰り返されることが不自然になる理由についてももう少し考察が必要である。

【参考文献】

郡史郎 (1989) 「強調とイントネーション」『講座 日本語と日本語教育 第2巻 日本語の音声・音韻 (上)』明治書院, p316-342.

植田良照 (1992) 「福岡市及び周辺地域の方言の新しい現象について」『佐賀大國文』20, p48-56.

平塚雄亮 (2011) 「福岡市若年方言のッテー標準語の「って」と対比して一」『阪大社会言語学研究ノート』9, p55-65.

Boersma, Paul and David Weenink (2020) Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. (Version6.1.16), <https://www.praat.org/>

表1

	a			b			c			d		
	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii
A	2	1	3	2	1	3	3	2	3	2	2	3
B	2	2	3	2	1	3	3	1	3	3	3	3
C	1	1	3	2	1	1	3	1	3	3	3	3
D	3	1	3	3	1	3	3	3	3	3	3	3

	e			f			g			h		
	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii
A	1	2	3	2	1	2	2	3	3	3	2	3
B	3	2	3	3	1	3	2	1	3	3	2	3
C	1	1	3	2	1	1	3	1	3	3	3	3
D	3	1	3	2	1	3	2	3	3	3	1	3

	i			j			k			l		
	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii
A	2	1	2	2	1	3	3	1	3	2	1	2
B	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	2	3
C	2	1	2	3	2	3	3	1	3	1	3	3
D	3	1	3	3	2	3	3	3	3	3	1	3

	m			n			o			p		
	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii
A	2	2	3	2	1	3	2	1	3	3	1	3
B	2	3	3	3	1	3	2	3	3	3	1	3
C	2	1	2	3	2	3	3	1	3	1	3	3
D	3	1	3	2	1	2	3	2	3	3	1	3

	q			r			s			t		
	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii
A	3	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3
B	3	3	3	2	1	3	3	2	3	3	1	3
C	3	1	1	2	1	3	2	1	3	2	1	3
D	3	3	2	2	1	3	3	1	3	3	3	3

	u			v			w			x		
	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii	i	ii	iii
A	3	3	3	2	1	3	2	1	2	2	1	3
B	3	1	3	2	2	3	3	3	3	3	3	3
C	3	3	3	2	1	3	2	1	2	2	1	1
D	2	1	3	2	1	3	3	1	3	3	1	3

	y		
	i	ii	iii
A	3	1	3
B	3	1	3
C	3	1	3
D	3	1	3